

平安京の邸宅

京都市内は住宅が密集しており、広い範囲を一度に発掘調査することはあまりありません。そのため、平安京跡の発掘調査では、小規模な調査を繰り返し、その点と点を繋ぎあわせて道路幅や各町内の建物の様子を復元していきます。

左京域は中世以降も繁栄しますが、平安時代中期以降、右京域は低湿地であったため人びとは居を移して衰退し、田畑に変わっていきました。発掘調査をすると、右京域では平安時代の遺構・遺物がよく残っている場合が多いのに対して、左京域では平安・鎌倉・室町・江戸時代と繰り返し建物が建て替えられており、平安時代の遺構・遺物はほとんど見つかりません。

このような平安京の中で、広い範囲の調査をおこない、1町（約120 m四方）域のほぼ全域を明らかにすることができたのが、京都府立山城高等学校敷地内の調査でした。

京都府立山城高等学校の場所は、平安京の住所表示に従うと、平安京のなかの北側で右京一条三坊九町・十町にあたります。発掘調査の結果、大路（幅24 m）、小路（幅12 m）にかこまれた、1町（約



右京一条三坊九町の中心建物跡

14,400㎡）の規模をもつ宅地であることがわかりました。

この場所は宮にも近く、下級役人が五条以南に住居を与えられていることからすると優遇された場所にあたります。

建物は1町の北半部に中

心となる建物群があります（91頁イラスト参照）。建物配置は、東西に長い建物が2棟並行して並び、建物の構造から南側にあるのが主殿で、北側にあるのが後殿と推定されます。儀式・公的建物である主殿に対して後殿は私的な建物と考えられます。これら建物の両側には東側・西側ともに2棟の南北に長い建物（脇殿）が並び、計6棟の建物が整然と「コ」の字形に計画的に配置されていることがわかりました。

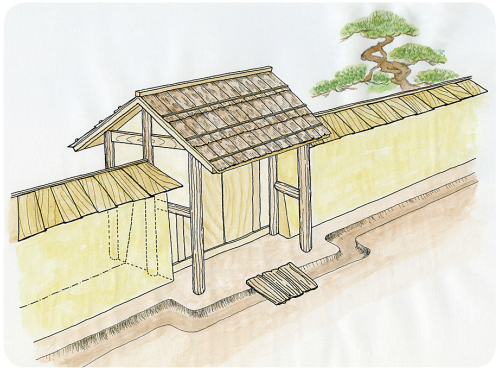
中心建物の南延長部には、たかつかさ鷹司小路に面して南門（正門）跡があります。南門は、二本の門柱と四本の脚柱から構成された、格式の高い四脚門しきやくもんであったことがわかりました。

都では、三位以上の貴族には1町以上の宅地、三位以下には半町、庶民には32分の1町の宅地を与えたとされています。右京一条三坊九町で見つかった宅地は、1町分の宅地を与えられていること、建物が「コ」の字形に整然と配されていること、平安宮と同じ軒瓦が使用されていること、正門には格式の高い四脚門を使用していることから、三位以上の貴族、もしくは皇室に関わった人物の邸宅と考えられます。ただ、残念なことに、邸宅の所有者については、文献に残っておらず、現時点では学問的に確定することは困難です。

（村田和弘）



右京一条三坊九町の四脚門跡



四脚門復原図